「シスターフッドに相応しい街」

増山雄三

先日、厚さも過ぎ涼しくなったので、宝塚の宝梅に住む、女房の姉の家を訪ねるため、久しぶりに阪急今津線に乗って、逆瀬川駅を降り、散歩がてらに歩いていく事にした。

そして、そこを流れる武庫川の右岸を南下すると、赤松交差点があり、そこから西方を眺めると、六甲山系の緑の中に、小林聖心女学院の尖塔が小さく見え、その麓にある小林（おばやし）駅近くまで、スナックや居酒屋が並ぶ、真直な道が続いている。

この小林聖心女学院は、カトリック系のミッションスクールで、小中高一貫教育を行なうお嬢さん学校で、出身者には、俳人の稲畑汀子や作家の須賀敦子らがいるが、あの遠藤周作が仁川にいた頃、夕方聴こえる聖心のアンジェラスの鐘に、心慰められたという。

作家の有川浩の「阪急電車」は、今津線の駅ごとの挿話を記した小説だが、中での一番の見せ場は　恋人を寝取った女の披露宴に、純白のドレスを着て、討ち入りを果したヒロインが、車内で出会った老婦人に、小林で降りて休んでいくといいわと教えられ、駅近くのスーパーで着替えた後、町の中のツバメの巣の多さに、癒されるという場面だ。

それを読んだ私は、渡ってくるツバメにとって、この町は安心して巣をかけ、子育てにできる町であり、もう残り少ない人生ながらも、いつかこの町に住んでもいいな、という考えがよぎったのは、自分でも意外だった。

この小説からは、いま観光面では無視されている、小林に対する作者の愛情を読み取る事が出来るが、孤独を抱えた各世代の女性達が、行きずりに出会い、励まし合い別れていくという、淡い女性間の連隊を示す、「シスターフッドの物語」である。

一方、「歌劇の街」として名高い、終点の

宝塚は、小林一三による郊外開発で作られた所だが、近世以前の市域は、武庫川によって左右に分れ、左岸の中山寺は、京阪地区からの、多くの参詣客で賑わっていた。

それが明治中頃、まず、右岸に宝塚温泉が創設され、関西の奥座敷として興隆し始めた後、大正期に阪急路線が開通し、左岸に新温泉やルナパーク創出され、プールを改造した**パラダイス劇場**で、少女歌劇も創始された。

当初、和洋折衷から出発した歌劇派、その後は洋楽をメインに、「**清く正しく美しく**」のイメージに基ずく、健全な大衆娯楽として発展するが、「**ベルサイユのばら**」のオスカルの様に、父権的家族制度の、面従腹背を促がすものが、散りばめられている。

それでも、日本では国内初の、同性パートナーシップ制度を受けたのは、元タカラジェンヌの東小雪さんで、宝塚市も、性的少数者の人権を守るための政策を、今では積極的に打ちだしているのだ。

こうした現実が、「タカラズカ」の世界に追い付いた時、時代の旗手に相応しい、「虹色の街」に変貌しているだろうが、宝塚は戦時中、朝鮮から強制連行された移住者が多かったという、そんな歴史も持った町である。

令和四年十月